

令和6年度 北空知地域入退院支援研修会開催結果・評価

項 目	内 容
1 日 時	令和6年9月26日（木）18:00～19:30
2 内 容	（1）講 演 テーマ 「チームで支える在宅ケア～みんなが一步前へ！」 講 師 北海道総合ケア事業団稚内訪問看護ステーション古川典子所長（訪問看護認定看護師） （2）実践報告 ①精神障がいを持つ方の訪問看護事例 報告者：訪問看護ステーションいしずえ深川 正田 健 所長 ②人工呼吸器を装着しながら在宅療養を続ける（ALS）患者 報告者：保健所保健師および訪問看護師 （3）意見交換・質疑応答
3 出席者	看護師43名、准看護師2名、助産師2名、保健師20名、保健師学生2名、薬剤師3名、理学療法士1名、介護支援専門員12名、介護福祉士・介護員1名、社会福祉士8名、管理栄養士1名、公認心理師、臨床心理士1名、ホームヘルパー2名、事務職1名、不明5名 合計103名（当日欠席1名）
4 結 果	1 経過等 ・稚内は、北空知管内と同じく、基幹病院が稚内市立病院1つであり、社会資源も多くないことから、同様の悩みや困難さがあると感じているのではと考えて依頼した ・訪問看護の役割、できることを知ってもらうこと、在宅での生活支援を学ぶこと、連携において必要なことを考えることを目的とした ・103名の申込があり、うち保健師を含む看護職が6割、その他地域の医療保健福祉職に多く参加していただいた 2 講演 ・講演では、がん末期や認知症の事例から、最後まで自宅で過ごしたいという気持ちに寄り添う意思決定支援についての話があった。 ・その中で、今の意思決定が、のちに変わってもよいこと、話していく中で意思決定のための整理をする伴走者であることが印象に残った。 ・連携については、体験談を含め、利用者のためにという共通認識を持ちながら、お互いに気持ちよい連携ができるよう心がけているとの話があった。 2 実践報告 ・訪問看護ステーションいしずえ深川正田所長から、利用者さんから内服の拒否言動があった場合、つい支援者は「薬は飲まなきゃダメです」「先生の指示ですから飲んでください」と言ってしまうが、本人の辛さを共感的に受け止めて、利用者さんの思いに寄り添う支援について報告があった。 ・保健所宮下保健師から、人工呼吸器を装着して在宅療養された方は今まで管内になく、今ある資源で本人と妻の意向を叶えることは当初は難しいと思っていたが、各機関の支援者が諦めることなく、関係機関の連携と、本人・家族の意向を丁寧に聴きとり、療養環境を調整していった経過の報告がありました。また、難病の進行に伴う家族の介護力、吸引や夜間訪問可能なヘルパー等、医療的ケアを担える在宅療養を支える資源不足の課題などの報告があった。

	4 アンケート ・アンケート回答者36名／103名。回収率35.0%。 ・(1)職種、(2)経験年数、(3)現在の職位、(4)講演は理解できたか、(5)その理由、(6)実践報告1の感想、(7)実践報告2の感想、(8)意思決定支援で印象に残ったこと、参考にしたいこと、(9)研修会を通して学んだこと、(10)研修会の時間どうだったか、(11)研修会全体の感想、(12)ケアカフェの認知度、(13)ケアカフェの参加経験、(14)ケアカフェに参加できるか、(15)今後の研修会開催方法希望、(16)希望する研修会テーマ、(17)その他意見・感想の欄を設けた 全体をとおして、参加者は講演内容や事例報告を通じて、意思決定支援に携わる職種として共感をもって理解を深めたことが伺えた。支援する側が良かれと思うのではなく本人家族の意向を踏まえた支援を行うことが重要であることを再認識したなどの回答が多く、研修の効果が高かったと思われる
--	--

5 評価 達成度 について ○→達成・ 良かった △→ほぼ 達成・ まあまあ 良かった が課題あり ×→達成 できてい ない・良く なかった	企 画	【目 的】 北空知地域の地域医療関係者と地域支援関係者が連携して、入退院支援を進めていく関係を築く 【目 標】 1. 支援関係者が、本人や家族の思いに添った支援ができるようになる 2. 医療関係者と地域支援関係者が、情報を共有し同じ目標で支援ができるようになる ○ <u>地域の入退院支援の課題に即した企画だったか</u> → 「○」 様々なケースが用意され、地域にも色々なケースがあり、様々な職種が色々考えるきっかけになりよかった。 本人や家族の思いに添った支援が目標なので、内容的にも「思い」を汲み取った支援展開だったので北空知看護研修会との合同開催だったが入退院支援研修会としての目標と合致していた。 ○ <u>周知方法はどうか</u> → 「△」 北空知看護研修会からの案内を受け、北空知地域医療介護確保推進協議会としての案内を関係事業所へ（107か所）行った。 参加者に介護支援専門員の参加が少なかったため、小部会としての周知がもう少し必要だった。 ○ <u>開催状況はどうか</u> → 「○」 103名の参加があり、北空知管内で98名、管外からも6名の参加があった。
	プ ロ セ ス	○ <u>小部会の打合せ・準備状況</u> → 「○」 北空知看護研修会と合同開催であったため、小部会としての協議は1回のみだった。 ○ <u>小部会のメンバーそれぞれが役割を遂行できたか</u> → 「△」 上記のとおり北空知看護研修会が企画・運営を担っていただいたため、小部会としての役割はほぼなかった。 ○ <u>ねらった参加者の参加、職種</u> → 「○」 ・参加人数103名で医療と介護の連携のそれぞれ要となる職種が大半を占めている。 ① 看護職41.7%、②ケアマネジャー11.7%、③保健師19.4%。
	結 果	○ <u>参加者数、職種</u> → 「○」 3 出席者に記載のとおり

	○ 参加者の満足度 → 「○」 ・アンケート結果からも意思決定支援への理解が深まったこと、本人・家族の希望と意思に寄り添うことが大切であることや、精神障がいを持つ利用者の意思の尊重、難病患者に対するチーム連携事例からの学びなどが感想として寄せられた。 参加者は意思決定支援の必要性を理解してもらったと思われる。 ○支援関係者が、本人や家族の思いに添った支援できるよう検討できたか → 「○」 難病患者をチームとして支援していくといった内容があり、本人の思いをみんなで共有し、支援していく大切さを検討できる機会になったと思う。 ○ 医療・地域支援関係者が情報を共有し同じ目標で支援できるよう検討できたか → 「○」 上記記載におなじ ○調整ルール（様式3）から得られた情報は適切だったか。過不足はなかったか→ 「△」 メインは意思決定支援だったので、調整ルールとは離れた内容だった。
まとめ	・北空知看護研修会と合同開催としたが、意思決定支援などの課題について入退院支援研修会としての目標とも合致しており、「支援関係者が、本人や家族の思いに添った支援ができるようになる」という目標にも合致していたことから有意義な研修会となった。 ・参加人数が直近の研修会より多く確保できたが、介護支援専門員の参加が少なく医療介護連携事業としては更に周知が必要だった。 ・アンケート結果から、研修会参加者が意思決定支援するにあたり、「どのようなことを意識しているか」「どんなことが難しいと感じるか」という設問があっても良かったのではないかと。こうした設問により調整ルールの必要性がより鮮明になるのではないかと。 ・今後の研修会については、近年参加者が減少してきている背景として、地域課題や現場職員の困っていることと、研修会の開催目的に乖離が生じてきていると推測されることから、アンケートを実施しその結果から課題整理をした上で開催検討していく。